

「独り」に充電されていく

孤独の自由さ

変な言い方やけど、「駆け込み寺」を十二年間やってきて、「自由と孤独」をいま楽しんでいる自分がある。

六歳のときやった。喫茶店で父親と“母”が会話してた。俺はブリキの飛行機で遊んでた。

「この子、どないすんの？」「俺んところ、子どもも生まれるから、無理や」「うちかて無理やわ」「子守くらいなら使えるやろ」「そやなあ」……。

自分が喫茶店を出たらどうなるか、六歳には十分判断できた。

意味も分からず父親に殴られる理不尽さを味わった子どもは、その意味を知ることよりも、まず自分の身を防御する術まで身に付けた。胸のポケットに手が伸びたら灰皿を持ってくる。タバコケースを振ったらタバコを買いに走る。そやから、新しい“母”のところで生活するようになって、腹違いの弟や妹がミルクを飲んだら、背中を叩いてゲップをさせた。二時間後には先回りしてオシメを取り替えるのも率先してやった。そんな一歩先んじるというやり方で自分の身を守る方法を覚えた。

少し大きくなると、「人生は度胸とハッタリや」と疑わなくなった。誰彼かまわず戦闘態勢を取る。誕生日、授業参観、運動会、クリスマス、が大嫌い。そんなものに甘えたら自分がどうなってしまうか分からんから、気持ちの中から遠ざけた。

冷水を求めて、それを温かく感じられる自分になろうとした。あえて傷に塩を塗り込んで、平気な顔をしていられる自分をよしとした。

そんな人間が金を持つようになったら、どうなるか。近づいてくる人間をまず疑って、何を考えているのか先読みする。シッポ掴んだら勝ちやから、常に相手の表情を探る。

そういうことが体に染み付いてしまった結果、誰かと一緒にいると、常に緊張してる。絶対に一人でしか寝られへんし、新幹線のリクライニングシートも後ろの人が気にすることが気になって倒されへん。でも、それが自分にとっては当たり前。

そんな中で、唯一解放されている実感があるのは、車の運転中。この個室の

中の孤独感と自由さが、いま、いちばん安らげる。五十八年の人生の中でこれほどの心地よさは感じたことがなかった。そういう環境がなかった。

金儲けの仕事をしてるときの車の中では、ビジネスのことやら、騙してきそうな人間のことを考えてるから、一人を楽しむなんて時間ではなかった。何もしない自由を知るはずもない。いまは、そんな昔の自分を振り返りながら運転する。目的地までの数時間、走馬灯のように駆け巡る自分の過去。

外に向かって孤独

孤独になれる自由さとは、心が静かになって何のものにも囚われていない状態。それが味わえるようになったのは、駆け込み寺という活動をやってきて、自分が変わることができたから。

みんな自由を取りに行こうとしてるけれど、どこかに自由があるわけではない。こっちは不自由だけど向こうは自由、なんてこともない。

本当の自由って、何もしないこと。山の上に独座してること。靴を履かないで歩くこと。

究極の何もしない状態が孤独。その一人であることを楽しむのが自由。誰にも気遣いしなくっていい孤独の状態を楽しめたときに、本当の自由の世界が分かる。

ふつうは、何でもあること、いろいろ選べること、それが自由だと言う。五感が常に満たされることやと思うてる。だから、自由になりたくていろんなものを所有したり、いろんな可能性を得ようとする。一見、自由になれた気がする。でもなぜか虚しさがつきまとう。

それよりも、孤独でいられること、何もしないでいられること、選ばなくてもいいこと、それがどれほど心地よくて解放されることかを実感してほしい。五感の奥が感じる自由さを味わってほしい。

自由と同じでさかさまに見えているのが孤独。自分の内面が孤独ではないねん。外に向かっていながら、すっきりとしている感覚があるのが俺の言う孤独感やねん。一人ぼっちでさみしい、と自分と戯れてるイジイジした孤独感とは正反対。

つまり、孤独を「楽しむ」ことができるから自由やねん。いや、自由だから、孤独を「楽しむ」ことができるのかもわからん。いやいや、孤独になれることそのこと自体が自由である証拠なのかもしれへん。

世の中は面白いもので、人に支えられて生きているから、その分、孤独になることがむずかしい。でも逆に、外に向かいながら孤独である自分を楽しめるようになったら、一期一会の出会いが楽しめる。

助けてる人を助ける

病気になって初めて健康のありがたさを理解するように、孤独になって初めて一人ではないことを知る。

一人ではない。つまり、誰かがいる。

誰か？ 俺の場合は、後に続く者。

そう思ったときに、機関車として牽引するだけの俺ではあかんかと気づいた。問題を抱えた人たちを助けるのは「俺」でなくてもええ。「助ける喜び」というDNAが受け継がれることが大事や。

俺の本当の使命は、種を落とし、芽を出させ、成長させ、花を咲かせる、ということやから、種を落とす場所はどこでもかまわへん。

全国的に見たら、人口の多い東京がNPOの数もボランティアの人数も多い。だったら地方にはそのやり方が分からずに困っている人がたくさんいるんじゃないか……そう思っていた矢先、「話をしてほしい」「相談に乗ってほしい」という依頼があちこちから寄せられ始めた。

北海道、愛媛、宮城、兵庫……「行くよ！」と、どこへでも出かける。なぜなら、俺を呼んでくれる人たちは、誰かを助けようとしてる人たちだから。つまり俺は、「助けてる人を助ける」ことになる。泳げなくて溺れている人を助けることもやりつつ、溺れる人を助けるライフセーバーをもっと増やしていこうという発想。

だったら、出会いは自ら求めていくもの。一期一会どころか一期「多」会の気持ちで出かける。まさに「いつでも会える伝道師」のごとくありがたい。五十八歳という年齢を意識したら、いままで以上に自分の生かし方は縦横無尽やなと思えるようになってきたことが面白い。

逆に言うたら、人間は気が付くまでにある程度の年齢が必要なんやな。機が熟した自分に気が付くことができたとき、ごちゃごちゃ考えずに「やってみよう」と動ける軽やかさが生まれてた。

ボランティアのむずかしさは、目標が立てづらいこと。「売上一千万」みたいなものと違うから、ややもすると達成感が希薄になる。連帯感も見えづらい。すると、機械のような仕事になっていったり、辞めていったりする。志だけではむずかしいものがある。

だけど、最初から「たくさんの人を助けるなんて一人の人間には無理です」と頭で決め付けてるのも間違い。相談事を持っているのは「本人」なんやから、自分で自分の問題の本質は何なんだ？ と気が付いて、自分の問題を解決する

のは本人。ボランティアスタッフではない。そういうことが分かっていないから、理屈だけで判断する。

しかも、ライフセーバーの極意と一緒に、じたばた騒いでるときは助けはいかん。こちらにしがみついて暴れるから共倒れになる危険性が高い。疲れ切ったところを後ろから羽交い絞めにするのがいちばん確実に救助できる。

波の終わるのを待つ。嵐の海に揺れながら留まる。孤独になってもジタバタしない。海難事故を防ぐシンプルな極意や。

子どものころ、年配の船頭が教えてくれた言葉は、いまでも忘れへん。「泳げるやつが溺れるんやで」。